

阿蘇火山南麓の地域性

一 矢部町の農業を中心として一

今村 美智子

調査地域矢部町は、阿蘇火山南麓から南九州山地にいたり、中央部に中央構造線の延長である臼杵一八代線が通る深山幽谷の地である。中心地浜町とその周辺以外は、ほとんどが農業が行なわれている地域である。

それで、矢部町の農業が、地域によりどのように行なわれているのか明らかにしてみたいと考えた。

まず、地域の概観を行ない、次に自然を明らかにした。そして地域全体の人文の概観をおこなった。これらに基づいて、地域の農業を考えてみた。旧村別に農業センサスのデータを処理し各種の地域区分を行なった。それらをもとに総合的地域区分をして、地域性を明らかにしようとした。

この地域は、北部から中央部にかけて（面積にして矢部町の半域近く）阿蘇熔岩である熔結凝灰岩におおわれた緩斜面が、続いている。間谷山と緑川に沿った断層線以南は、それ以前のもので、侵食のすすんだ急傾斜地域である。

また人文面では、南北朝期に阿蘇家の本拠になったという歴史をもつ所であり、江戸期には、細川藩の圧制にたえたところでもある。交通面で、鉄道がなく自動車運輸にたよっている所で、他からの影響も少なく保守的な町である。

農業地域区分の結果、8つに分類され、それを、自然・人文に照らしあわせて私なりの分析を試みて、大きく三地域に区分された。

阿蘇火山山麓、矢部町北部の耕種農業・山林共に恵まれた安定農業地域、中央部低地の水田中心で畜産又は茶栽培など行なわれ兼業化も進んだ地域、矢部町南西部、間谷山地・南九州山地の山林中心の農業地域の三地域である。北部地域は、山麓傾斜がゆるやかで河川に沿って水田地帯が開け、高原野菜・畜産・桑なども行なわれ、経営規模も大きく山林面積も大きく意欲的農業地域である。現在、矢部地区農地開発事業も行なわれている。中央部低地は、谷底平野と火山性台地から主になっていて、灌漑設備も整い、良質米がとれる地域であり、畜産や茶栽培もおこなわれ中心地浜町があるので兼業化も進んでいる。南西部山地は、農業は自給自足のためであり山林経営や林業従事者の多い地域である。

この形態は、明治以来根本的には変化がなく古くからの農業の伝統が守られているのである。ただし、商品経済の発達により浜町と幹線道路沿いに兼業化が進み、農業より第3次産業へとうつつているのである。この地域は、山林にささえられて農業が守られている地域である。山林や農地への執着とここにいれば何とかするという自信、いいかえれば他へ出たらどうなるかわからないという不安のため農業が、続けられている地域なのである。